

## 蘇州日本人学校における国際理解教育の実践

～文化、スポーツ、語学での交流を通して～

【派遣在外教育施設名：中国 蘇州日本人学校】

取手市立稲小学校 教諭 中野 功

### 1 はじめに

#### (1) 派遣募集への応募から赴任まで

私が初任で赴任した学校に、ドイツの日本人学校に行くことになった先輩がいて、日本人学校の存在を初めて知った。その先輩がドイツに赴任してその学校の様子を色々と話を聞く中で、自分もいつかは国外で暮らす子どもたちの役に立ちたいと思うようになっていった。その後、念願だった在外教育施設派遣教員に志願し、平成23年度派遣が決定することとなった。

「赴任先は中華人民共和国、蘇州日本人学校」と聞いたときは、ちょうど尖閣諸島周辺で中国漁船との衝突事件が問題となっていた時期でもあり、家族を帯同していくことに不安がよぎった。しかし、蘇州で頑張っている日本人のために自分ができることがあると自分自身に言い聞かせ、精一杯頑張りたいという思いで赴任の日を迎えた。



《古い町並み》

#### (2) 中華人民共和国・蘇州市とは

中華人民共和国は人口約13億4千万人で日本の約10倍の人口を有し、国土面積は約960万km<sup>2</sup>で日本のおよそ26倍、広大な国土と5千年もの歴史をもつ国である。蘇州市は江蘇省南部、長江デルタ地帯に位置し、上海から車で1時間半ほど、人口は約600万人で世界遺産の庭園が点在する町であり、およそ7000人の日本人が住んでいる。かつて「東洋のベニス」といわれた美しい水路や町並みと、目覚ましい経済発展に伴い建設された超高層マンションや地下鉄が同居している。蘇州で用いられている言語は中国の標準語である北京語と蘇州語で、気候は亜熱帯海洋性気候、年間を通じて温暖で湿気が多く、日本と同じように四季がはっきりとしている。

#### (3) 学校の概要

蘇州日本人学校は平成17年に蘇州新区に設立された開校9年目の学校である。最初の所在地に地下鉄の駅やビルができることとなり、平成24年度に違う場所への校舎移転が行われた。開校当時はわずか63名であったが、平成23年の赴任当初は322名、平成26年3月には430名と児童・生徒数が毎年増加している学校である。



《上：旧校舎 下：新校舎》

子どもたちは毎朝、保護者による送迎、自家用車、及びマンションの送迎バスで登校している。登校すると、朝会まで朝読書の時間があり、子

もたちは黙々と読書をする。本校は蔵書数が多く、本好きな子どもたちが思う存分読書に親しめる環境がある。また、お弁当の時間が終わると10分間のドリルタイムがあり、漢字の書き取りや計算の練習をして力を伸ばしている。下校時刻は全学年同じであり、低学年は6時間目が遊びの時間（自由な学級の時間）として過ごしている。中学部は週に2回の部活動（サッカー、陸上、バスケットボール、硬式テニス、バドミントン、卓球、美術、音楽）があり、全職員で指導にあたっている。



《下校の様子》

## 2 実践内容

### (1) 中国語・英語学習

本校では世界に通用する日本人の育成を目指し、中国語・英語といった語学学習に力を入れて取り組んでいる。小学部中学部ともに中国語の授業を週に1回実施し、ネイティブ・スピーカーの先生が指導にあたっている。中国語は希望者を初級・中級・上級の3クラスに分け、1クラス10～20名前後の人数で行う。少人数での実施となるので、一人一人のレベルにあわせ、きめ細かな指導を行うことができる。中国での生活が長い生徒などは上級クラスに入り、かなりの語学力をつけている。



《中国語の授業》

中学部の英語の授業では、週4時間の授業の他に、ネイティブの先生による英会話の授業が週に2時間行われている。週に合計6時間の授業を実践することで、発音はもとより実践的な表現力を身につけることができる。中国語圏でありながら、英語検定準2級や2級を取得している生徒もたくさん在籍している。

### (2) 現地校交流

中学部では、1年目に蘇州外国語学校の中学生が本校を訪れ、現地校交流を行った。当日は小グループに分かれ、中国語と英語を使用しての自己紹介や校舎の紹介、歌やダンスなどの文化交流を行うことができた。本校の生徒たちは日本のソーラン節を披露し、熱のこもった演技をみせた。



《インター校とのスポーツ交流》

2年目は反日デモが激化し、予定をしていた現地校交流が1ヶ月延期になってしまった。その後も反日の空気が収まらず、結局その年度に現地校交流を実施することはできなかった。そこで、蘇州のインターナショナルスクールとのスポーツ交流を計画し、男子はサッカーやバスケット、女子はドッジボールや8の字跳びを行った。相手校の生徒と共に汗を流し、交



《現地校によるソーラン》

流を深めることができた。

3年目は蘇州外国語学校との交流会を再開させることができた。今回は相手校を訪れ、一緒にゲームをしたり、校舎内を案内してもらったりした。大型の液晶ディスプレイが各教室に常備してあることや、校舎内に映画館のような大ホールがあることに大変驚いた。また、一昨年に本校のソーラン節を見た相手校の生徒達が、独学でソーラン節を勉強し、披露してくれたことが大変印象に残っている。

### (3) 蘇州ワールド（異文化体験）

赴任以前は中国文化を学ぶ機会として、主に日本人の保護者ボランティアによる中国結びや二胡の演奏会を実施していたが、各学年単位でバラバラに動いていたという状況であった。そこで、赴任1年目の年に、中国人の講師による全校生徒および保護者を対象とした、学校をあげての蘇州ワールドに取り組もうという計画を立ち上げた。切り絵、刺繍、中国結び、書道、二胡、篆刻、農民画、太極拳などたくさんのクラスを開催できるように計画を進めていった。中でも一番大変だったのが、協力してくれる講師の先生探しであった。中国語もうまく話せないため、通訳の方と一緒に何度も足を運んで協力をお願いしたが、なかなか講師が集まらない状況不安が募っていった。また、開催したクラスの数だけ通訳や技術補助の方が必要になるので、保護者のボランティアを要請し、綿密な打ち合わせを行った。蘇州ワールド当日は、本物の技を間近に見ることができ、生徒も保護者も大感激することができた。後日のアンケートでは「せっかく中国の蘇州に住んでいるのだから、蘇州ワールドを今後も是非続けてもらいたい。」といった意見が大多数を占め、苦労した分以上に得るものが大きかったと感ずることができた。

蘇州ワールドは幸いにも2年目、3年目と続けることができた。1年目に講師を引き受けてくださった方に、新たな講師を紹介してもらったり、同じ講座であってもレベルを分けての開催をしたりすることでさらに内容を充実させることができた。蘇州ワールドで中国文化を体験し、興味を持った生徒が習いごとを始めたり、保護者と一緒にその後も継続して取り組んだりした生徒もいた。



《 刺 繡 》



《 二 胡 》



《 書 道 》



《 太 極 拳 》

### 3 成果と課題

中国語・英語を含めた言語運用能力を身につけることで、外国の人々とも積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が養われてきている。生徒達は日常生活においても現地の人と積極的にコミュニケーションをとり、異文化を理解して受け入れることができるようになってきた。学校として、現地校交流や宿泊学習などの現地の人と触れ合う機会を意図的に設定することで、更なる生徒の自信につなげることができたと考えている。反日デモの際には今後の現地校交流の実施が危ぶまれもしたが、「ソーラン節を踊ってみたい」「日本語を学んでみたい」という中国の学生の声を聞き、地道な運動が日中の交流の芽を少しずつ伸ばし、実を結んでいることを実感することができた。

また、蘇州ワールドを通して、中国の様々な文化を「見たことがある、知っている」という知識から「やったことがある、面白い」という体験に変えることができ、中には「できる、大好き」といった意識につなげることができた生徒がいたことは大きな収穫であった。

課題としては、蘇州ワールドを今後どのように継続していくかということがあげられる。講師探しから、打ち合わせ、ボランティアの募集など教師の負担が大変大きいといえる。当日も小・中学部の児童・生徒・保護者を動かし調整することは、たくさんの労力が必要となる。また、講師への謝礼や材料代など金銭面においても予算をしっかりと立てて取り組んでいかなければならない。大変有意義な活動であるだけに、今後未永く続けていけるような工夫が必要である。

### 4 おわりに

平成23年度から25年度まで3年間の赴任期間は、あっという間に過ぎていった。中学部に配属となり、1年目は中2担任として、中学部の技術・数学の授業を中1から中3まで受け持ち、教科指導に苦勞しながら先輩方に見守られ仕事を覚えることができた。新校舎の設計に携わり教室配置やグラウンド配置を考えるという仕事も経験させてもらった。2年目は中3担任と中学部部长を兼任し、中学部全体をまとめながら進路事務をこなすという、最も忙しい1年間であった。旧校舎の引っ越し準備や新校舎での片付けの時期は多忙を極めた。3年目は進路部長として中3担任と二人三脚で進路事務を行ってきた。また、昨年の経験を生かし中学部部长をバックアップすることができた。1、2年目でできなかった学校行事の精選や体力向上のために施策を進めることもできた。中学部での中学部部长や進路部長の仕事を通して、全体を統括する難しさや面白さを学ぶことができた。

今、振り返ってみて、蘇州に自分が何を残せたかをはっきりと答えることはできないが、「蘇州で頑張っている日本人のために自分ができることは何か？この学校に自分は何を残せるか？」を常に自問自答しながら、惜しみなくやってきたことだけは間違いない。この蘇州日本人学校において国際理解教育を進める中で、国際社会に生きる日本人とは何か、日本人としてのアイデンティティを深く考えることができた。この経験を今後の学校生活の中で生かしていきたい。